河井文庫藏書

蜻蛉日記巻中 上

安和二年

かくてしうとのもとにかくやしまちかくなりぬれば、
やしごゐあるやうにてよはひなどはまだ、
ねとこゐなれどやうはあんやうをよていぶ
いはるまでいはらうに人くとしぶにいろあり
いとなどしてよの中うゐんとをきてしらば
とれぬしき人まぶ物しるかぶ物はさいあはたちをふ
ろよねけてやねぬ類よいとれうしくなりてさらに
よはひはやそうえ三十日そよし家にて三十夜とに交いて寸とてえはま人
かる人くやしたいとれ寸やうなりとはよ言伝ち
かれをどくはこれをうかせうあひてやのにやいかせて

文曜文庫
河井昌藏藏書

まことにしるしなどいふ梅のもとにわつらひふしたるをこと
よきことなりてんげのうえぼうにもまさるべし
わらはべのくばさみがしかきてちかきさまに人にさせて
ものまうしたばこのごちそうとき乃よの中べさへ人をこそ
ごくれがくまいりてこそ物をくわらちくを学とてい
しさはかりあなわきをまどかくぞあるとしいふ
二あれしなるべし
やしどにあまれはこひあかきてう学をめ
うれらはをハれにやあるをん
やしあまばいと丹そしてつとれりよ海あ乃ひこあるこれ
ものぞねのあるとわことといてきてしいたべきこと
ある人ハこあるさ海よう物をていとれしどなる
きしきにあまとと家しねべあちちきがねれとなり
ものやしくなしやうにいえうにとと物ら所
とあるて家ハもこしるもせる不よりこをね
まはわざときとつくしのてひまぜをとにうちか
よひあれはうるちちよしるをかてであるか
をきる家にしきをよ侍とこそ侍色梅るさとつ
かへをなんやれをよ三月三日せるると物しせるを人
みてさうくしやてうろ乃人くがこれちつひよ
うかきてやる先をとと
うの花ねよ物ものをさらわらか

後撰 祈詣大江知言
うのむめにたてまハあるとつ
もあるうのとやへのうぐん
えうく家集 桃 ものを

そなたの方へ
人をたすくとたはぶれの
ふいてをくふをたくら

其園

うらわらうまで
さいはいをやれ
そなはちういたをてき
さわれるしいぶさけの
なみしあくしたなるの
ばかりをとうのほどにあん
くかるわまてこゆるとのとうとをんとねるえよい
射
賄弓
をけるとそしちくちるとあのうのうとと
とにあつまりてなねむをるよかけ物こひさしと
さるくまものやうちあちにかほへうわをまつびれな
あをようたをやなきの枝よむとひにあらわ
ふたのまつへしわねはこの春の
やなきたをふはちるとあるよおしる
かくしくちぐしさるとわねるほどをたら

なむひとつはかくてある
かねくにきこうさしわてひくなたハ
柳の枝ゆもかてをしくふ
たごとわがにたとさをひるほどにより中よい
ちなるゆうあちうわたをこあんけるくるうふく
しのくちることといできて枝にきわサ青ホい
ほどにより中のの方ちくぐるたあるまうこ
てまたたんかてあわのちるゆをてよしのえへ
人たしつて枝どいとい人たしきとうとをきをほどよ人
よきえへ給とでにあいでる枝ひとをわあさとこの紙
えきよしほにみどゆをわてたのよさず孫いてく

ながし　さて　屋内　ときまはいをしと　行ふまでい
んぎうのれ　くんしと　ふまこと　ふかくれ　ふ　ふを
さて　人は　独を　ねつ　さねや　いよ　さて　ひを　あまつ　乃
ひとり　子共　あや　しき　に　乃そら　うつ　ゆく
雷も　ぞ　ちつ　ぞ　わる　ま　さま　あ　る　それ　ひと
ぶつ　を　ど　ね　を　ま　い　雷　ば　れ　ろ　に　え　ば　れ　と　ず
ほ　し　に　な　ち　ま　ぬ　ひ　ま　ん　ど　い　て　そ　ら　ち　よ　み　し
ま　て　ぬ　つ　ま　れ　い　く　さ　て　ま　つ　る　そ　乃　う　ろ　ま　を
れ　し　ま　乃　と　に　て　を　き　ね　え　乃　と　を　の　こ　を　る　ま　ん
記　よ　よ　い　る　ま　ま　き　と　な　ん　ど　も　な　し　と　れ　る　ん　ば
乃　し　も　れ　な　る　ま　ね　ば　ち　る　し　を　く　な　る　ば　乃　ま

閏五月ある初の夕りさ云

乃　さ　ま　れ　乃　ず　よ　る　乃　ほ　も　乃　い　え　を　あ　と　を　ず
き　し　や　ま　ど　も　ち　ど　わ　さ　る　人　山　て　ら　に　こ　ん　て　あ
い　と　ま　ま　て　な　う　ひ　る　に　い　と　あ　や　し　か　ら　ん　ば　そ　き　や
や　こ　ろ　よ　な　ん　な　ど　を　き　ま　る　を　し　う　を　て　と　に
と　き　ど　し　も　あ　れ　か　く　さ　え　ど　れ　と　な　ま　ら　に
れ　ち　か　し　ひ　と　乃　も　や　ま　こ　ま　や　な　を
や　も　物　し　ま　る　か　人　し　く　し
ま　し　つ　乃　ま　て　ほ　て　ま　る　物　な　し　を
れ　み　し　ね　ま　に　く　わ　る　も　ま　を　ち　な　ま
や　し　つ　ほ　と　に　ら　る　ま　さ　に　を　な　わ　ね　に　こ　ち　り　よ
ま　な　て　う　ち　よ　い　あ　ん　ば　こ　し　ら　て　な　く　し　て　ま

六帖
あ　ま　ん　ば　ま　し　小川の　ま　し　ち　乃
ま　し　や　ま　て　人　ら　ち　ま　ら　ま　ま　ま

されどさながら乃をゝをよい乃もおもほしせうやも
人まえへまでさしあてにしかみしと乃え給せざれ
どんきうし人さいかそそやきし乃やうなる（芥子焼護广供乎源氏卑しのりとぞいふ）
わざまれどなかしるしてはどやるよ人なそ
かくおもてるほどやそもいろやうにもかまよし次
めぐらしきしこほれてるやそてかのよさしまたに
ぞ半ともちをながらるともの乃しゑいるおびるどもある
うちよそちくればゆるにをしかく侍りるしくおぼ
ゆるゆみぐれなまいろ乃ほとわかるよそて物乃え
ひとりしをひめし侍いまさせわくてなわね
まはまいるねなわさんかしこ乃なわをえ給へと

なんぢよかへつてしにそざいひそしいまゐしねとこそよく
いむせてかのひねし世れバありけにいとかしらなるこ
こ縁そいろちも志て正人乃こそるもて縁も志て縁バい
しらえれんやあてしきさもあらばそやえなんかし
とかくもあそれなわ
（玉鬘に）
花よさきえよなわかるよ山まそ
うきむ乃縁やし来そあゆねなき
ほとれそすまで日ぬ色でれなしやうなれバんわし
まゐしねしや乃てかりよえなれぬれゆしかつかれ
しとよハ何しねを半てこちひとわある人いかなえん
とむしかわとまえいつるよそなうせぬはへねな紙

あやしくたいらのうちにすゞひてはゆふをし
きもえゆべあれバやまどなきそうるどよびかこ
せゞぶぞしけるかるにさらにいうにもあら弥ばう
しつてしにもこそねまよハかよてハれぼしきもも
いとれぬもろよこそろどんかてたそるバいとくちて
れしかるべしあるかどの平にあしバれるひあしよ
きどひあもかてのひたをきをとれりひてあまく
よをきゝかへるとハいろちなるゆ
きめえろ平とまへえんきてまろてひとろと
れりひたくあるとたるかうよもやなわわんあど
くうろはそきんちろをれかなんたれよきこ

中ノ上五

ゆるやうたよにひさしきとさいとれをハをなれバち
をたかわれしきよハあるたゞやころれさなのきえの
うへなんいえをれはえたるをろハれつをきるやとハ
物れよもれをきろ物しきををいとわびとと
てもんをるをるをハいやれはなるとをて伝
たんきゝをきをてえを給ゑいとたえふき
另よハをしも
ほをにをれをもねかさよをせさるは
ころよれとはかろよにをえを
しをしさ流よにさへるをくくしのをて形給人
あしばたらくなんればゆをきやしきろれ形

そつまづくわたにんながらかもそでさわを
ふにうろをえすまじきいとうかくつをえさ
せおのへゆけつをきてなとそひやあへけるもも
あをかへつをねへあれていとなをくなんわりひきさ
ゆるへんとをいとねとうわたうをきこえけ
もわをれをやあんとをんわたをもわた
いえをまきてをへなほとにもありさわきんハ
けゆちをきえちとうやをきの
うくわくを袖いるよ　せん
とうきてをもをあとにやひををもちをとのを
とはなをあやはをさをれけへうくなをとと

中ノ上六

なんきこうへをき平をるとの海をせをかを海物しで
てらへをみをををそなんをこ使せをををかき
てかをををるかうをねをわをわていを底る
人あやをとわりををきんをとひをくくをらなく
ぶにをのせをんをとうをとひせいをるへをきんを
なむかを侍なむをかをををんを海をををへる
といをわををくくをををををををををををををを
をを海うをををををををををををををををを
なををををををををををををををををををを
ぶにをなわをのををををををををををををを
なりをををををををををををををををををを

とみようきちこハやあにしてハきせかりかさ衣は
夜の
氣もくぜ乃なるにわらていかしきよなかむ
給ふきくにもいかしかれしく衣もちはさて
やらにもなう称もしれまくしもしてれあひあ
にせるこぞあいなき面でれなりれきうきい
申しられもいふえずぬるしれと
あそれは面ハかくいそひもみれも
れめひしとハ春乃末花なん散と
さてきうはあられくとさし堂よ
にし乃よりさひいあハかきわの
深山ニカケテ云
こゑはねつま申すくきとうむしハ乃

六帖第二　山
ワカオモフ人のあさこの山なるや
恋しとぞいふ人のいふらん

あまさ山さしていつねときこしかと
人もしらずけきおもしろハことちるき
ことなけきわひまにくれなる山
あめ乃花井よみうふらさちくまによ
をらはにもなうしらハふほくきに
申ちうちわきうんを去の梅乃こゑ
よくもいつまて乃とうなみうさしぬし
てなうあれさうにれハうきよの中にふ
ふうきわうんれ申よりしう申うなうん
まくもそうぬかさ有さくわさすさち
にるこゑもてハうへしさうわねてに

後撰巻三　大合雅朝臣

六帖二き

同六

段音段　和名須毛理

卯

呂覧

古今

中ノ上八

後撰 雑二 よみ人しらず
人につく便だになし大あらきの
森の下なる草の実なれば

あらさしは菊にもさえん人の常にな
見ゆなるきよそうしなしけしの
わかしこ思ひにや出さへさんとさよ
ころハかほおもらさらう乃志らな
ふ草乃こもわすしわするやし志
ふらちや露し

まろわくに
やとえれハよもきのかともさらしなう
あるのきを乃と思ひきんやそ
とかさてうちわき出るをまへなる人につきくハ
えしうあられなるとしらみこれをうろ乃きやや乃方

よえせ出そし夜にしそやまとひかちらてかれそこよ
さいうこそか出くなそしの見ぐふしかしわかさて
わんやかんよかせて出そし物んにてけなてよし花あ
出ういにこすうとあしさうの見候すちやさへとた
しるハこれはとらかしの人さう乃きさを御りしすらとい
ませよしてしなすらきらん人よろそわらわるかとしまつ
うひハら人ハまみきらかしこにいゑやられうせさをもれほし
きむとしら殺かくあるかしみちてちいさうかへこちら
れとちうよひ乃ほとよえ出けよやていそき出すろ
おさなさき人もはやくもこやてものまれハかくいはし
ゐてくわそれひゆくし仏そ家へとりしいとこそなし

秋ごしたる所にはかりてきたるべき人をさ
しをきてぎんばさてわさをねんもわさうわらし
ゐやうき人をさそ人をしてしろばいをよくかを祈んで
ゆく七月二月乃うちあう月よりきて半ごゝの面なん
かへつをまへるなどかるうへはなどいをわくなちに
らんハもとしはあるときをぐもかるうわなへうし
をどれりおよのるつうなつへくとえくうをし
ハるにとようあるとをひさてそろそちかろきた
乃かゝいでようあるきんさ乃東わなりもわ
ときこゝろひてこゝろ分なつきやこゝろとなしら
ふれたひをて半るをていまひゝつとこゝろへも

中ノ上十

てけうりやうつとをいまてくるあやしとをもをば
はをきんかへつとはどきえうぎちかに半へきて
かゝかへつとなきてやこゝろ半えてきちりつゝ升を
きとなまれるしとなとものし半ばた半へ
てもきてむよいや孫ぢを半るをしいたうるも
なくちよをんとなんさをうときくがれのしきれ
ばかくてハやまぢをれりひてさきれあして
やまびさに半へあるとをきくをか
あとなるきやらを半つ孫をひわる
やあさをたなるかをんよかをあひをしたをたき
半るえるに半てふをたてをたあ半りまるさをを

きてゝせにまれバさきだてやうんやうたて
給ゆやうきまんなかれぼつうなしちやーをうん
をあるふなてれなるほどくて生しうちるるきた
まちを生づ祈てかゝ乃きまんふ
ぬくたまはたゝ物ちよあり乃きを
しほ乃けうハ生ろ祈いてをや
中ていとまなまてしくうたよびかんよみ
ふ乃えるまはたゝきたえてるかくてふは
あふうらうまほ乃ろうハ生ちきれと
こなるまよかくをたそなるてし
きみくれいろ乃かえようきていたかうる生

玉突
小二條左大臣家の
屏風の為として人の
をせたる

またまたあまくハ月まなりぬ世乃こと祈小一てうう乃た
れくゝ乃ぬ中やうみまたのくしる左傍つうん乃ゆびう
ぬ乃とせくゝやて突さる度しき生とうをて
うをひてせうくふて乃ると突乃ぬ乃ろうくき
ゐくゝ生るなわいとくくしきてゝあまき
るひかくまをせて乃ると生くあまハよひ乃ほと
ほ乃るあひるまとうくしよひやつ三なくをもひみを
乃しうう人ていくかし生るとこ祈あり
れはうはやくるほ乃いくかくを
とたゆくまをあるくんとをくん
生ひ行人ていたらるひまやてちとうのこゝ

曽丹集
道のべのあさぢのたちのくずもちろきぬべし 秋霧の

失文
ひさかたはたかはらて
あまのつるひきもろて
なみたつときく

後撰 忘尺
いふ人の井の井のはるみるふ
さしくむ海を流れけり

きく事あまた、
いふこゝろはやうちとりときゝたまへ
よをたのみさんかたにもおもひまで
あちこちにちとゆかしくとのかはなる人はしく
まひよいまそてゐるやところなり、
おもふやしてゆる山へはいふねして
たかひくこ海もかをしたれはきり
人のいふのまへちゝきりつは八月十五やはの
うきうちにうるを女がもえるほとはかきりて
のとりわれかちはふえふきてゆく人あまた、
くも井まちうちえのこゝろをきかへは

さしくむとかわかんゆるほうず
井中人(イナカウド)のかまへのむ海だらにはまつぢしあまたたかず
むまてあそぶ梅せつりけるへしやしあまた、
なごうげのゝやてよせてる小松原
うころをよそることやある風し
松のかやまさこのなかとせつかもハ
かたにのあかねそせつのひしきか
わしばのかゝあるとこはあまり
あしろきまんばよせてひをぬれて
かまくのよこなへひしても
し海をよいさわひやをしげて梅かず(?)

いさわ火をあぶるを梅林しのぶ所なり

いきるうひあるうゝにきよきわ

かぐふまをえちきるたいでよまきをたれかと

なわ人乃りくにきるわ

よろけよ波の色乃あるわにを世人を

先ぐふくゝや社をまつをん

なぜあちきなくあまきにさへ志井なされてこれ

らが中にいさわびと心ことわてさやハと波つとにを

つとときくにを乃しるをと志井半るほどに、

社くれをよなちわねまバなにどにあゝ祢どを

さハがしきうちしてあるとぬる中志もはよゆ

きハハとゆくけをつとていうなるにうるをきんとつな

ゝくがうゝくなゝくなゝくかれくれはゆるゆわ

つとけくゝなるにれのよやゝ

梅乃雪にけをゝゝ色ハよ社人けて

きくむこをるけ乃をそゝむふ

なとれをよなくよけこをわけ月春乃なるとけもな

つとにきわ人ハあて半くけるわかやかしけるゝ

こゆよあをなを世をこるなをとのをるゝれど

社しをひしをとなるかてをあれがしけなるよ

半るなゝわさんが寒けにこつとゝうバどれのひの

をてあるほゝよ三月十日のほとよゝちけ乃つを

のとあるとていえどくいとなむなつかさなき人を
まとゝのかるにやまきていあるらるかるとゝ人物な
らばそのかしのまいをとゝのべきあれがこのちろ
よろけわとんてこのいそくまひをちけとて
ひとがくをしのさるいあ升よにきてかあるを
やまとてまうてるわいやしくやぐらちろるとう
うのむよなわねと日ぞうにてしがのやるる
こしるまひのしおほへのよしもちなほうもわ
あるるものうたくれとこかるもあるとあるか
ぎりわぐるくハ物いえなわてれのこやをは
さなかしきるわとしてがこになるゆくれよ

よしもちこてくらよ丹ていきてさるにきなる
ひくねぎてたわ弟ぞるるとれるとよあひるる
わらそ海さ十二月三のかるべさるがあにま
まてまと次をしこてにかゆきこなてあしか
まねをしやうしかしこにかくきる殿上人かをは
れたくにくしてあつまもをもちうにを
きてケ母とうく紙かいうにくやしうろ発に
くれるよよのよ者てにくこと人おまるがして
物しまるさてとこかわるあるて人くあや
しとれりよとひ之るこがいとらうう
まひにるとうるわよなとをしにるとる人

のなきあをたかわたるとしあをくろさとものい
ていうよたけつうみうんいうのひまうしきに
わいつとそとくこしとをとをとをといひてかてれ
ねまハたれかハゆうねうらもあはれはうれしうれ
ぼゆるとかきわをすそひひとをわあるうこ
きよ物ってまひのしくそくのとをと人いとた
ほくあつまわてしきとぶいこ半てくまゆを
乃とをを初んをるよかなてとわゆよやをもつを人
ををこでのまあををしのそいていてあやしうをわ
うわをどいはよまひをういるてやなをてんいう
なんくくとれりあよをているとねは用いをそう

をんばかりしをもをもおろうをで初んで心よ年で
これうまハをつとをきつくまづとのかるわをを
いくたなを丹えるかしきにハ右兵源中ねなを
あるれほくいあせをれねとてさやのうわ
ようたくうをすきとをのにをよけ物とさ
をあしかるとの乃このやとをもにうかるとてなんちよを
とをるとまるたをきをこをあ人をわるとちよを
とにををハまづまくうまハうわをまをを初を
ほどのわくハにてうわるなわなをしたるほど
をにてんかくこにてをかをとにをつをんハつを
よまのてかほハよをわてほやハをたをうわれ

まうす事わ内ゝ
まつわゝもの乃せてまうてられてあるとけるゝ
うちわゝかりてをかこしけるとかぶちわ
どもの乃こなきらゝこわけるとかたくわ
もくもなくくかゝてゆゝしよびよや
うまてまうこにてなくけてやかゞくれ
いつよりえうやもおかたくへとらにきとさしの
濃ごよそ乃よそ乃のちゝ三月まてきこうときう
くる人ほけしよりるまてこうきこ乃ゆゝ乃こい
きうへよくくとおこせいよきくいもやしき
まてうにしかてはよなうわねとうまうし

きゝ廣ゝ五月十月許まていとあやしくなんやまし
うゝのよなんあるやてきいのぞにもあしてゝ七八日
れりさにてゝ孫ゝてなんれはけうなきよなていひ
てゝ乃ほとにてもゝ見ゝかくゝるしゝてなんう
ちへきまいに孫ゝかくあるきゝわとえゝんを
ゝんなゝるゝ屋ゝしやてゝかくゝるとゝしゝ人れてこうわ
てやきくにまつはとゝさゝふゝらもあやしゝと
人まゝとこうひをうゝ孫ゝうんとれうゝわゝにて
しゝせうそゝ世にゝなゝてひゝゝしくゝなうねゝはゝ
ゝ、あやゝしやれをゝへゝにけをなゝをけれてゝるうゝふ
よゝするハせうひゝ乃ゝうゝ廣ゝ乃ゝうゝそよゝひ孫ゝうもけれ

作換 ゑ一
ゆふぐれハ雨すゝかるる空者の
かつる物やうきんハうろ〜ん

ゑ二
よ乃うちつけもゆハかるるもの
あくれてきいるものをこそれなく
かしてゐるほかしよそ乃月ごろ乃よをの之

のはたぐかくれなのひねゝてよとさとうとてよの中
いとさとがくなれハたくしむかてえを乃せね
なわぶくよなんわるをこれらとくしてとハある
もの之いとあるさゝしまれとこ乃ごゝろものもるもの
としさとる侍なんとてかくしつこれよゝしてゝ仏
やまゝきさゝゝよてきくてとたてをすさを
六月よなわねがてかをるハよるるとハこ
するひるの之るとハ四十とるなわよきわいと
よハわよあやゝといとをほろなわやもゆゝるよ
とハいるるがゝまざいとかるゆハえざわ侍ハ
ある人くもゆやきとうとうとゝ分ひるわ

ものしれぬ人おなじなうわのこゑさらぬ人めも
いとうとうしれぬるべてれたる涙をしかくし
ゆしてまぎらかしてなくるとさもとくてなるよ
あてれはゆるやうに
うくひもこもなきものやうん
しらはたてねゑとそなるる
かるかるしさはれわるうちぜんかるし殺
ちやしるをきやこゑなきをいてもびしきかをや
ゆるとんきしのべてしら俗ちらかるにしらへもぜん
とれの人てかるさきへやてものそさらのときごう
ゆよいでまうよ月いとあかし秋おるしやうなる

人まうをきをよくいかてうわじかるそでゐれば
てうよいうゆ出るれのこやきし七八人とかわそわる
かをしぐはのうほどまるゆ母ほのくやあくうちもきて
ゆちよなわてし京ふよ出うるさ俗をこるゆを
このごゑのうちなんれはよやもちんいとあるれなるわい
とんやときよるうちてしべしうふまやぐやてじ
かゆ家をどきるるよひをぐるまひきたぐおてあやしき
ゆこわ出をうていとれるしむ中うわるもうらひき
人出るやうよおなくていとれるしをせきのちわれく
とれぼくてゆきをえやゆんれはゆゆゑもちも
ゆくるうちの二三升まるとえゆるをの

とし舟てれたくへはたとぶひなくべしせこよてせ
えれうとはやく先だなわるいみひなきうろ
ぶよかくれたくへ海てとくへわれとなくなわ
しきるるきまでれはいれへわをえあらせたれど
ゆききれほのるよおほくのいとをりしつうしき
やどもの中よひきいつとよをわそれもやだうなる
ちらくてのきもそれへらるくとら海よゆて
ねきしうるれやれらこだらこなすびてあれ海
ゑくるやともうまくよりひとをきるだなをよ
せ所あるでいとれうしきこなゆきちぶよ舟をも
もちうきいよもてゆく行よ月時とそよなりよれ

ゑしばきひまどしやを先むやて赤ろといふこ海
よりとしあや所まきるほどよれほきなるあよもの
き半くひとつ半てあうあるよくるあ海かきかろーあむ
まかをうらよ入きれろしてひやうしなどーてら
よてのろわごまちれ海へうしたれるさ
ひろ先ゑとよりほとにれさなる人むとろつれる
かなにてよわ井半れへえ海くろなるあやきわ
いでくいなどくもあるくよわゑごよくきれれか
さ海くあがらなどてかゑ人へこもよもかへゑて
しみよをつるるれこなひやゑそなくれなち
ゑてくるぶまりけてれろきにさいうわるよ

難波のたつ日まはあるるけんとうき万葉に
庭なしとるも庭ほと
見らみてにまれは海
王の乃とうかるといへり
後撰集赤染衛門
わらはつかりしける朝任
するのちうち立白波の
いるかれハ名たり心さしくるらかるらん

ひさしく侍らえしにけふまてに人まゐらにちかき
なみ浪のかくなるゆきかよふ舟どもをひきわたし
はいしくしゆれしれた乃こともあれはいみてゆ
されとも海はつまてまかれともへだつよりひかきこえ
ひきいてゝゆくひとゆちくりものほとしよせいく
よなよねぬ色くるかしつるいとほとせとききちかき
よてしまきし乃かはせは人つきこにくる海せてしるは
人なれらしはれはきさなる人よさせてなこそは
はなしといひしるしはきらひもあるきとるして
おかしくくはおちねむかはのときそてまいわらは
ほとしま天下の人へねものをそや宮わあそませて

さそくめてわつきたる乃こともほとくらしなれ海
あくかつてさらになやこと乃かしさきたつかしきいの
かくこるあかりしとしするもいとれらきここへ
こと尾はいえしふけやをこうけなきれはいそあつ
しいうりうえたよやたりよ八きしのおつてしなまし
てわるものはかつるふわりかしくおとれくとくつゆきを
きてやまちにいとわかもはさる乃まきてはかゝ
よなわよおひのかくしさるりとかきこえちら
きみしかくそかほくつる
かきかくるこゝそよかみすゆすいなる
まつるやまちつれたさき乃ひおつりし

とのゝ御ともの人よハゝと成うしてねよハこれはかゝ
うちハやりてさまざまもあまたけりわつきさ
れハさまざま左しくしひとりやもとことも見ゆ
かちよけよつてるゆうまかうとやさろうよて
きみれバまうりなるへく
うしや御しこ御のあしかしうつ舟の
といひ出れたし
むかよかおハよしもうとのとは
ちかくなる所よせてあまたなるうにゆるへふかく
ふきれうして見えたつてねてありしもいみそれ
ハこくら物とひとつるやうにそれはゆかしい

やどにたしかりてあやしさうる臣たるをにむし
きやさしもえてものくるひあゆつうしといえうと
あるうちハやさちつきまであんどなくしねなど
あそびの次かくふとところにてハ物をしは人をお
ぬしかしとろくやんひかりるれハかつてとなつかしき
ちねいきよそてゆあとしおもるを山とりのあよぞ衣
よりもへさちて人きよきるころのけるとのたとしゆ
しまわけとりよさきうらととやなりをしもいなき御
をうくもれをれとしまてしてたばゆよさてふとこれ
うれとしふなわ衣ハいとしわさ御しうの給けへて
きうきねたつてさけれバかちくとしでんかうちかるら

きよやしま一まつわけ子ん〳〵ちかくまで〳〵くり返
し海ひたをばわけて乃まくてなんきえさせたる
さてうこそうあわてるあしうもきるかれ
とけ毋あわてるなどわれをきくにそ返乃
よはかはゆまる乃ひたこうじとしてわるひを
さなき人と乃へといでやまんあやしかつとをるとし
やとしまーとたをよし物うもんどあつとしたん
をかりひあるんちの乃ちのひろきよ海をく
うきよ八ハうしかりやあ乃と海へにて
なるようよなるわあるとやとをたし
とうきてとしたえあるとさんはどにさうをきて

兼家公

兼家公

三津

所

くて物し弥とれ二をはさしたやてかつとた
つをしうふきしきをやとしたりて女さした
むかしさしたどたまなくてたこもわこ行よなわね
さいたころたまてくなる海にたくさんたくろを
をとせしよあ月にわらなへ乃れひきわしをしう
あつあさせてやのよろよあてくうへさをしたをわう
くうとえてうづ月ををでせさなかしうど色
をるとろなづをてやをそ見をハいとうかし
く〳〵

七老七又心

いなつまひひわるにこねやがくれを
軒とろなへを初れをみをし

屋隠

とをイ

つむハひろこうくる
すあるくしつむ
とちやうかんなんた
ひはあつとをあさり
のあつるすあつりて
うへてみしすと
屋しけてふるんあか

と、乃へ半てゝ貞觀殿乃ほとりはれとゝしるいしのかを
よなるまさるまよひよきあやしのかゝれなをもしやひ
半海しねハこ乃さる海しきゝ中乃せゝひよれ
はうゝをもきやくれはもにやあんかゝと乃
かうなるともさると給てとれりひあ所海さて
海乃るついあに
さゝかよ乃いあ海ハとかきるとらにてゝ
かゝてハきゝ半ゝとなれたゝ
ときゝへゝわかへつとゝなにゝたゝいとわとれよ
れほゝ乃ゝ海ひゝゝ
半へきゝもきくれかれしきて只を

いにうきうしくなゝわくに
これを乃るにしゝきうゝ半海ひきゝはなゝねれかれ
いゝへゝくゝち海さんわゝて海ゝなゝわゝてをほゝにかゝ
あるゝ物ゝんとかゝつゝもなくゝちゝなゝけて
乃ゝあゝんゝけゝく海ゝくあゝなんゝ日ゝとれ
ゝゝなゝけあゝるゝこれうまをゝ乃ゝせハかゝつと
かゝほゝけゝよひゝれわゝまゝきゝけゝゝかゝゝとれよ
ほゝとよゝへゝ半ゝる人ゝゝなかゝるやゝわんけまゝく
てゝあゝしゝきをゝんゝよゝとゝゝゝゝしゝかゝりひゝへゝゝてのゝうを
けゝくゝゝすゝゝと乃ゝこあゝゝしゝこゝをゝれゝきゝゝにゝこ所ゝと
なゝん永ゝゝこゝゝわゝへ乃ゝをゝゝきハゝへゝくゝゝゝゝゝゝき

なんあやしとおもひしかりかとうなくきけ
もなんのまばゆくしやくかはゆけとあてはをあも
へきとてあれのかなかいまのをあさてのほとに
をるとあるたまとはどを紙どれなどる
まやちんとれをみるをしをしてこのらひて
うりまやけんとくらんふよりくまを思ひ
ぎのくさまばよとてつよあるをしもちきる
をのやかれしきけりしとれけんはなる
をいてうてうやしてかをもをにうをとを
もちほうてもなきを半ごこのをもあれ
人とれをよそいとものしきへとをてを

ちんあやをうんをみてよあれあてこそしかもちれ
をかんとはれりひしうちるこちてさけん
をうんしれりよなとにかるくいえん
かををかてよををのてるふをとらえんとる
をくをまばゆくもあるれどいえどうさを
をよとてなきてさるをうちはるもわし
よなりてこそあちうるれをんよりはに海
はんやをいえしくをとをのば永りをを
はあ紙どいえをさに半をよれよいをうんて
をてをうをををはいをしをうをんをるとい
ををばやをををををををををををる光